



筑紫女学園大学リポジット

博物館との連携に関するワーキンググループ2010年
度活動報告及び活動を終えるにあたって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/225

【活動報告】

博物館との連携に関するワーキンググループ2010年度活動報告 及び活動を終えるにあたって

時 里 奉 明

The 2010 Activity Report of the Working Group Concerning Cooperation with Museums and the Conclusion of Activities

Noriaki TOKISATO

はじめに

2010年度のワーキンググループは、昨年度に引き続き生涯学習センターのもとで活動した。当年度は前期に公開講座、後期に特別セミナー及び協議会を開催している。ワーキンググループは2010年度で解散し活動を停止することになったので、これまでの成果をまとめ、残された課題について記しておきたい。

1 2010年度活動報告

1) 前期・公開講座の開催

- ・ 6月3日(木) 14時50分～16時20分 本学8302教室 81名出席
中込潤 (直方谷尾美術館学芸員) 「地域の“元気”は博物館から - 直方谷尾美術館の試み」

2) 後期・特別セミナー及び協議会の開催

- ・ 1月26日(水) 9時10分～10時40分 本学8302教室 62名出席
「博物館学芸員課程特別セミナー」
パネラー：山崎久美子 (九州国立博物館博物館科学課研究員補)
高田 美里 (筑波大学教育推進部教育企画課)
須佐 利子 (元九州国立博物館交流課「あじっば」マネージャー)

柏木 千恵 (株式会社タクト)
星原めぐみ (財団法人古都大宰府保存協会学芸員)
高松 麻美 (太宰府市文化ふれあい館学芸員補)
上原 あい (春日市奴国の丘歴史資料館コーディネーター)

- ・同日 11時～12時30分 飛翔会館3階会議室 15名出席
「博物館学芸員課程協議会」
パネラー7名、本学教職員

3) 活動の成果

前期は直方谷尾美術館の学芸員である中込潤氏に、標記のタイトルで講演していただいた。当初は地元実業家による私立の美術館だったが、直方市の美術館になったあと、福岡にゆかりのある作家を支援し、子どもに親しみやすい美術館をつくるという方針を定め、さまざまな活動を行うようになったことが語られた。

とくに子どもスタッフを募集し、当館の学芸員として展覧会を開催したこと、最近は商店街のアーケードや大相撲の直方場所などに美術作品を展示し、美術館外に活動を広げていることをスライドを使って説明された。美術館が地元の子どもたちを中心に大人の協力も得て、地域を元気にしていく様子を理解することができた。地方の美術館の可能性を感じることができ、有意義な講演であった。なお、直方谷尾美術館は子どもたちがさまざまな創作活動に取り組むイベント「子どものための美術館」が朝日新聞社により評価され、2010年度「朝日のびのび教育賞」に選ばれている。

後期は本学の学芸員課程が開設して15年を超えたことを記念し、特別セミナーと協議会を開催した。まず特別セミナーは、学芸員資格を取得し博物館で働いている、あるいは働いたことのある卒業生7人を招いて、資格取得の動機や博物館の職を得たきっかけを話してもらい、仕事の現状や課題について報告していただいた。在学学生も多数出席していたが、先輩の話によく耳を傾けていたように思われる。

次に場所を移動し、卒業生と教職員で学芸員をめぐる諸問題について協議した。本学の教員から学芸員の現状、博物館と学芸員、大学・博物館・地域の連携、本学の学芸員課程の4項目について課題を提示し、卒業生の意見や感想を聞きながら話し合った。本学のみならず日本における学芸員の養成や現状について、アメリカのそれと比較しながら意見を交換することができ、意義深い協議会であった。

また話し合いの中で、博物館実習の時間に展示を企画し、博物館を利用することが提案された。博物館に勤めている卒業生を通して、本学が地域と連携していくヒントを得ることができたと考えている。

2 活動を終えるにあたって

2005年度から10年度まで6年間の組織と活動について、おもなものを年表にまとめると次の通りである。

【組織】

- ・2005年6月 博物館と大学の新しい関係を考える協議会
大津忠彦、緒方知美、田村史子（責任者）、時里奉明、森田真也
- ・2006年11月 九博連携準備委員会
委員長：中川正法 大津忠彦、緒方知美、田村史子、時里奉明、森田真也
- ・2009年4月 生涯学習センターワーキンググループ
センター長：酒井均 大津忠彦、緒方知美、田村史子、時里奉明（責任者）、森田真也
- ・2011年3月 ワーキンググループ解散

【活動】

<2005年度>

- ・2005年7月16日
シンポジウム「ようこそ！九州国立博物館 [開館] -博物館と大学の新しい関係を目指して」
第1部 三輪嘉六（九州国立博物館館長）
記念講演「新しい世紀の生きている博物館」
第2部 本学ガムラン・クラブ演奏
レクチャーコンサート「アジア青銅楽器の響き」
第3部 シンポジウム「博物館と大学の新しい関係を目指して」
司会：森弘子（太宰府発見塾塾長）
パネラー：三木美裕（九州国立博物館学芸部企画課長）
赤司善彦（九州国立博物館展示課長）
中島達也（福岡女子短期大学講師）
田村史子（本学助教授）
時里奉明（本学助教授）

<2006年度>

- ・2006年11月9日
本田光子（九州国立博物館学芸部博物館科学課長）
特別講義「赤色に見る古代人の思いと現代人の心-古代の朱丹に魅せられて」

<2007年度>

- ・2007年6月28日
平中英二（九州国立博物館副館長）
公開講座「九博の目指すもの－アジア的視点から文化交流を考える」
- ・2007年10月18日
学内研究会「博物館と大学の連携活動に関する意見交換会」
- ・2007年11月7日
木下達文（京都橘大学准教授）
公開講座「博物館と地域連携－ミュージアムの未来像を求めて」
研究会「大学と博物館の連携を求めて」

<2008年度>

- ・2008年6月12日
公開講座「文化財をまもり伝える－新しい博物館と修復の仕事」
第1部 藤田励夫（九州国立博物館学芸部博物館科学課保存修復室長）
「九州国立博物館における修復施設の概要」
第2部 鈴木裕（国宝修理装演師連盟技師長、株式会社松鶴堂取締役）
「文化財の修復と保存」
第3部 鈴木裕・中村隆博（国宝修理装演師連盟技師）
「文化財修復の実演」
- ・2009年2月6日
協議会「地域の博物館との協議会」
田村史子「大学と地域博物館の連携の現状と課題」
「博物館の地域活動の現状と課題」
奥村俊久（筑紫野市歴史博物館） 重松敏彦（大宰府展示館）
大庭孝夫（九州歴史資料館） 以上3名報告

<2009年度>

- ・2009年6月4日
岩崎竹彦（熊本大学五高記念館准教授）
公開講座「思い出のチカラ－地域博物館と回想法」
- ・2010年3月24日
特別研究会「「大学博物館」の意義と開設：運営に関わる諸問題」（人間文化研究所と共催）
第1部 高倉洋彰（西南学院大学博物館館長）

「大学の知性の象徴：大学博物館」

第2部 「大学博物館と地域連携」

森田真也（本学准教授）「大学における博物館・地域との連携の現状と課題」

緒方泉（九州産業大学美術館学芸室長）「大学博物館の連携プログラムについて」

安高啓明（西南学院大学博物館学芸員）「大学博物館の地域連携活動－西南学院大学博物館の場合」

岩永省三（九州大学総合研究博物館教授）「九州大学総合研究博物館と国、地方自治体との連携事業」 以上3名報告

※<2010年度>は本文を参照。なお、所属や職位は当時のままにしている

ワーキンググループの母胎は九州国立博物館（以下、九博）の開館をきっかけに発足、本学と九博の連携を中心的な課題とし、さらに地域社会も含めた関係の構築を模索しながらさまざまな活動を行ってきた。詳しくは、既に刊行されている『論叢』及び『年報』の活動報告をご覧ください。

なかでも、2007年に本学園創立100周年記念事業として、九博で開催された特別展「本願寺展－親鸞と仏教伝来の道」に本学の教職員が企画から参加、協力したことは大きな成果と言っていいだろう。ほかにも執行部に九博キャンパスメンバーズの加入を要請し、学生に対する普及広報活動を行ってきた。本学の隣という地の利もあって、キャンパスメンバーズ加入校のなかでは、本学の学生が最も利用していると聞いている。また教員も九博で学会を開催したり、授業で活用したりしている。2009年度に行われた大学の認証評価において、本学が九博とさまざまな連携を図っている点を高く評価されたことは、以上の活動が第三者からも認められ注目されていると言ってよいだろう。

しかし、活動を続けていくにあたっていくつかの問題も生じていた。まずメンバーが教員のみだったことである。活動を行うにあたって、相当な量の事務が発生するが、ほぼ教員で処理しなければならなかった。ゆえに、活動を拡大しようとする、教員の負担は増大する。教員の任意で発足した組織は、その後何度か改組したが基本的な性格は変わらなかった。教職員がともに出席して協議する他の委員会方式とは違っていた。

またメンバーに博物館連携の専門家がない、博物館そのものの研究者がないことも影響した。博物館との連携は組織間になるので容易ではなく、確かな方針のもと時間と労力を要する。実際に進める専門家の不在も当初から問題になっていた。

最も大きかったのは、現状をどのように認識し、そのうえで九博さらには近隣の博物館とどのように連携するのか、メンバー間で方針がまとまらなかったことである。そもそも教員の任意でつくったので、現状を維持し活動を継続して実績を積み上げていくという意見に対し、このまま本学の取り組みやメンバーが変わらないのなら何ら発展性がないので、解散はやむをえないという意見が出され、ついに妥協点が見いだされることはなかった。こうして、2010年度をもってワー

キンググループは解散することになった。

ただ前に述べたように、本学に残した成果は小さくない。たとえば、NPO法人文化財保存活用センター（以下、タクト）との関係である。タクトは九博から展示史料の管理業務を委託されている。そのタクトから本学の博物館学芸員課程を履修している在学生に対し、アルバイトの紹介をお願いされている。学生は在学中にタクトでアルバイトし、卒業後もそのままタクトに残ったり、そこから別の博物館に職を得たりしている。九博と直接ではないが、タクトを通して間接的に連携していると言えるだろう。

幸いなことにワーキンググループメンバーのほとんどは、学芸員課程を担当している。従来の活動をふまえ、その実績を継承しながら新たな展開が可能だろう。筆者は博物館との連携を模索する第一ステージを終え、第二ステージに入ったと考えている。

（ときさと のりあき：日本語・日本文学科 教授）